

ウルトラマンファル シュ

平均以下のクソザコ野郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンになろうとする者たちの前日譚。

目次

ウルトラマンファルシユ

—
1

ウルトラマンフアルシユ

目撃

地球から1500光年離れた小さな惑星、ソンプレロ星雲。その星に住んでいる若い異星人、ピエールは自身の宇宙船を修理している。流線型のスタイリッシュなデザインの宇宙船。ピエールが初めて買った新品の宇宙船だ。

『く… さて、こんくらいでイイよなあ。さっすが天才ピエールくん！開発だけじゃなく修理の腕も… おお?!』

流星。

青い光が遠くでチラリと見えたとせば、こちらに向けて真っ直ぐに飛んでくる。青白い光の軌跡を描き、ぐんぐん、と勢いを増しながら。

『う、おおおお?!?!マジこっちに来んのかよオ?!』

ピエールは急ぎ宇宙船に乗り込み、流星をかわすために向かつていくが…

『… あん?』

青いエネルギーに包まれたその流星は、星屑ではなく、ヒロイックな外見の異星人が納められたシンプルなデザインの救命カプセルだった。その只事ではない様子に戸

惑ったピエールは、とにかくこのカプセルを収容しようとハッチを開け、静かにカプセルを船内に納めた。

『さーて、生きてますかねエっと…』

ピエールが収容したカプセルは、モニターがついている、白がベースの錠剤のような楕円状のカプセルだった。その中に静かにうずくまるようにして、異星人が眠っている。

異星人は青と白の体色を持ち、鋭く切れ長の目を持っている。

胸にはスパーード型のカラータイマーをつけており、全体的にヒロイックな姿を持っていた。

『…う、ウルトラマン…？』

この異星人は、ウルトラマン。

M78星雲『光の国』からやってきた、銀河を守る正義の戦士である。そしてピエールという異星人は…

『…ほ……本物オオオオオ！?!?!?!』

ウルトラマンに少年の如く憧れる、風変わりな異星人であった。

地球。

東京の一角、少しだけ年季の入った、だが新築といつてもまだ通じるような不思議な見かけのマンション。住宅街に建てられた、悪人面の夫とおしとやかそうな妻が管理人を務める防音マンションの名。

その名は『星雲荘』。

このマンションの一室、『096』号室の住人こそ、主人公である男の住居である。

目覚まし時計が金属をけたたましく鳴らす音が鳴り響けば、もともと部屋の中央にある布団から伸びた手が力なく時計を止める。

「：： あー：：、なーんで、こんな時間に時計セットしたんだっけ」

陰気そうな男が、首をゆるゆるかしげながらぼーっと考える。

自分の働かないくすんだダークブラウンの脳みそを必死に働かせる。

「：： あー、そうだそうだ。不二ちゃんがかつちに来るんだった。：： じゃあ着替えなきゃ。：：」

ダンスからシワひとつないクリーニング済みの服を引っ張り出し、自分の寝巻きであ

る漢字Tからその服に着替える。

自分の財布、スマホなどを入れた黒のハンドバッグを手に持ち、靴を履いて扉の外へ出ると、真つ白な日の光と、少しぬるい風が男を出迎えた。現在の時間は7時20分。

「…ん、んん…。」

「ハ、ハヤタ殿、おはようございます…ひゅふ、ふふふ…。」

「おお？おはようございます、有江（ありえ）さん。あれ、今日は外に出るんですか？」

「は、はい…今日は、調子がいいので…ひゅふふ…。」

男『向淵 ハヤタ』に話しかけた奇妙な笑い方の女性は、『有江 アサヒ』。精神的な疾患で職場を離れ、現在は病院に通いながら療養中の女性だ。

「そうでしたか…お気をつけて。」

「…む、向淵さんは、これからどこへ？」

「田舎から出てきた妹分を迎えに。しばらくこのマンションに住みたいなので。」

「…となると、駅、ですね…私も、そこまでついて行っても？」

「随分と遠出しますね…本当に大丈夫ですか？」

歩幅を合わせながら、二人はマンションを出ていく。

「朝ごはん、食べましたか？」

「…い、いえ…実は、まだ…駅に行く途中で食べようかと思っ…。」

「僕もそうなんですよ。そこのお店でなにか食べますか？」

汗をかきながら急ぐサラリーマン、キックボードに乗りながらどこかへ向かう少年、ゴスロリの風の服を纏った少女……

この一日の始まりと言える朝の時間。

様々な服、特徴、年齢の人物がサラダボウルのように混ざり合うが、しかし交わることなく日常を謳歌している……。混沌としながらも、平和な時間。

「……そ、うです、ね。はい、た、たべ、ましよう」

きらりと閃く、二つの流星。

青と、赤。二つの軌跡は宙を舞い、社交ダンスを踊るように、戦闘機のドッグファイトのように絡み合い、ぶつかり合う。その物珍しい現象に、そこにいた人物達は目を引かれるが……。聡明であった人物は、気づいてしまう。

あれは、流星ではない。

あれは、異形のものだ。人に似たモノと、異形の戦いの軌跡なのだ。

そしてそれは、こちらへと向かって来ている。

「っ、有江さっ

ツゴオオオオオオオオ
!!!!

…：… なんだから？なんだから、あいつは、もう片方は、データベースで見たことがある。だが、それと戦っている、やつは誰だ？

姿こそウルトラマンに似てはいるが、あんなやつは、見たことがない。別の宇宙から来たのか？

それに、合流するはずだったあの人…：… ルーカスは、どこへ行ったんだ？

土煙が晴れても、戦いは終わらない。

乱打。乱打。乱打。

子供同士の喧嘩のように拳をぶつけ、蹴りをぶつけるその様は、激しいながらも、膠着した戦いを醸し出す。

人に似た、パールホワイトにレッドのラインが入った、スーツのような人外と、大きな腕を振り回す怪獣『レッドキング』。大きな腕がパールホワイトの人外の顔面にぶつかり、大きく距離をとってしまふ。

それを好機と見たレッドキングは、走った。とどめの一撃となるはずの、渾身の一撃を打ち込む為に。しかし、彼は、見誤っていたのである。

『ツ…：… アアアアア…：…』

パールホワイトの武器は、徒手空拳だけか？

本当に、彼が自身の攻撃のみの力だけで吹き飛ばしたのか？

そして…

彼の腕が、光っているのは、何故だ？

『ハアアアーツ!!!』

瞬間。

直線的な光の波動が、レッドキングを打ち倒す。

これこそ、パールホワイトの切り札となった必殺技である。

ヒトに似た人外は、トドメのチャンスをうかがって前もって貯めておいたビームエネルギーを一気に放出したのだ。

それは偶然にも、この星に幾度となくやってきた戦士、ウルトラマンの切り札に酷似していた。

この戦いを皮切りに、偽物のウルトラマン達が、地球を守る物語が始まる。

ヒーローとなるものに、本物や偽物など関係ない。

どんなに弱くとも、どんなに小さくとも。

目の前の人の事を想い、考え、手を差し伸べることが出来れば、誰にでも、誰かのヒーローとなれるのだ。